

河川からみた埼玉平野の開発

—— 古代から家康入国まで ——

建設省東北地建 正会員 松浦茂樹

Development of the Saitama Plains from a View-Point of Rivers

—— from ancient times to the days when Ieyasu Tokugawa

came to Edo for domination ——

by

S. M a t u u r a

概 要

利根川と荒川で囲まれている埼玉平野は、近世の江戸幕府にとって重要な生産拠点であった。近世、埼玉平野では開発が進められていくが、ここにはまた、出土品である鉄剣から金象嵌銘文が発見され、近年、古代史に大きなインパクトを与えた埼玉古墳群がある。本稿は、河川との関わりが深い水田開発と舟運整備に焦点をあて、埼玉古墳群を支えた生産基盤を考察するとともに、家康入国時までの開発状況を論じたものである。

埼玉平野の安定した開発には大河川利根川・荒川の洪水対策が不可欠であるが、古代の技術では防禦することができず、氾濫を前提として開発が進められ、「不安定の中の安定」という状況になっていた。開発は少しずつ進められていくが、利根川防禦に重要な役割を果たしたのが中条堤と、それに続く右岸堤である。この地域の拠点として忍城が整備されたのが1490年である。

また綾瀬川筋から元荒川筋へという荒川付替が、さらに利根川水系の舟運の整備が、後北条家の時代に既に行われていた。家康は、決して未開の地ではなく、かなり整備が行われていた状況で関東に移封されたのである。

【キーワード：埼玉平野、河川、家康入国まで】

はじめに

1590(天正18)年、徳川家康は豊臣秀吉の処置により東海から関東に入国した。先進地域で京都にも近い東海から関東への移封は、一時、天下覇権の家康の思いを断ち切らせたという。つまり京都に遠いばかりでなく後進地域である関東は、天下を望む経済基盤が整えられていなかったという。そして関東平野の本格的な開発は、家康入国以降に行われたというのが定説となっている。果たしてどうだったのだろうか。

江戸幕府の前史として関東には、1192(建久3)年、征夷大將軍に補任された源頼朝による鎌倉幕府の創設がある。さらにそれ以前にも、関東平野での大きな生産力を推察される大規模な古墳群の築造がある。特に1978(昭和53)年、埼玉古墳群の一つ稲荷山古墳

からの出土品である鉄剣から金象嵌銘文が発見され、古代史に大きなインパクトを与えた。そこには中国史書で倭王武、つまり雄略天皇をさすとみられる「獲加多支爾(わかたける大王)」が記されていた。既に5世紀の後半、埼玉平野のこの地にも、大和政権との強い結びつきが明らかにされたのである。では埼玉古墳群を成立させた生産基盤はどんなものであったろうか。

本論文では、関東平野の中でもその中心に位置し、利根川と荒川で囲まれている埼玉平野を対象とし、家康入国までの開発の状況について考えていく。ただし検討の焦点にあてるのは、河川との関わりが深い水田開発と舟運である。近代になって第二次産業が勃興するまで、わが国の生産基盤は沖積低地の水田であった。河川は、治水・利水面からここでの水

田経営と密接に関連していた。また鉄道網が整備される明治時代の中頃まで、物資輸送面で舟運が大きな役割をもち、内陸部の輸送は河川舟運を主にして行われていた。このため河川を中心に水田開発と舟運を検討することは、埼玉平野の開発の基幹を明らかにすることであると考えている。

地の間を流れるようになったのは、近世初頭の1629(寛永6)年の久下での付替による。また利根川は、明治後半から始まる近代の改修工事以前までは、行田の北方に位置している中条堤が防禦の第一線となっていた。利根川は太田道灌の時代には綾瀬川筋が幹川であったが²⁾、その後、東を流れるようになった。近世の初頭には、会の川から古利根川筋に入っていたが、河川処理によりさらに東に向かうこととなった。ここでの開発には利根川、荒川の洪水防禦が必要である。特に大河川利根川の防禦は、地形条件よりして重要である。なお後背湿地は湖沼となっていた区域も大きかったが、これらが最終的に干拓されるのは、江戸時代の中期、享保年間(1716年～1735年)である。

2. 埼玉平野の古代の開発

1) 古代の稲作

荒川が現在のように、通常時に大宮台地と入間台



図-2 埼玉県の古墳分布図

出典：小野文雄「埼玉県の歴史」山川出版社 昭和45年 P.23

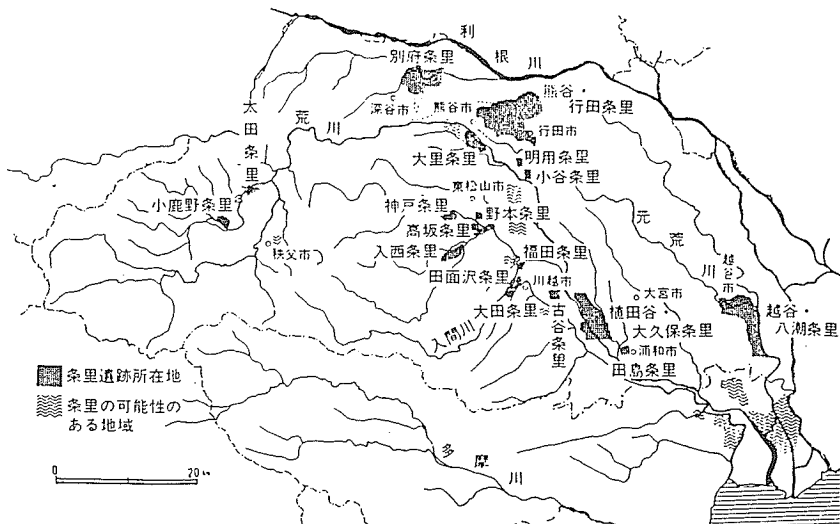


図-3 埼玉平野の条里概況図

出典：「荒川人文Ⅰ(荒川総合調査報告書2)」埼玉県 1987年 P.230

(140m)、稲荷山古墳(120m)などがあり、また近くにも若玉子古墳、小見真観寺古墳などの大規模な古墳がみられる(図-2)。大規模な古墳は、5世紀後半から6世紀にかけて造られたものが多い³⁾。

これらの古墳群は自然堤防上、あるいはそれらと比高がほぼ同じ埋没ローム層台地上に造られ、周辺の後背湿地と比較して河川の氾濫に対しては安全である。これらの築造には、多大な労働力を要した。そのためには労働力を養える生産基盤が必要である。

さて古代の土地利用として代表的なものは、条里制である。この地域の条里の分布を見たのが図-3である。これで見ると、埼玉古墳群の周辺には熊谷・行田条里、大里条里、その西方には別府条里、南方には小規模ながら明用条里、小谷条里が見られる。埼玉古墳群の造営を支えた生産基盤は、古墳造営時には条里制が施行されていなかったにせよ、その地理的条件からこれらの地域の稲作が中心であったと考えられる。

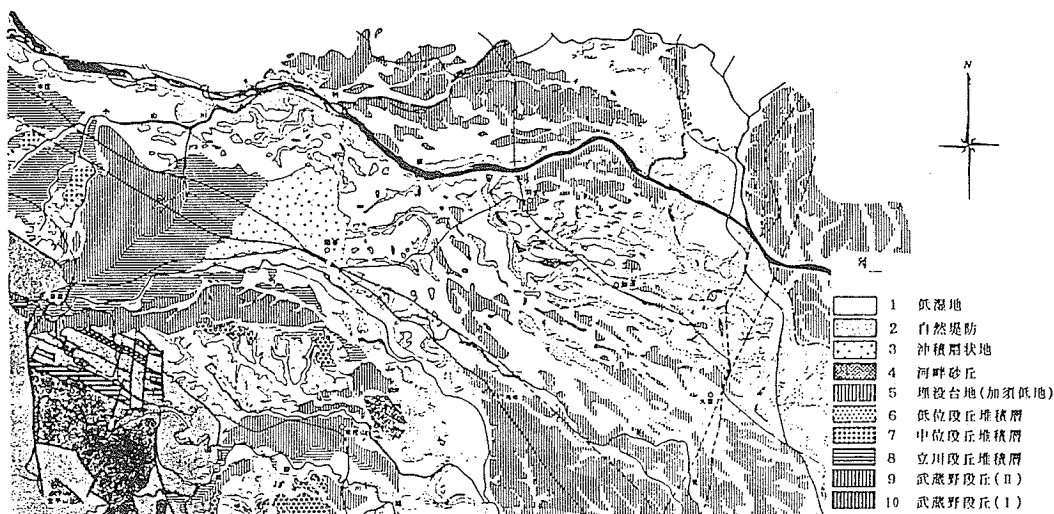


図-4 行田・熊谷周辺地質図
(堀口萬吉による「荒川自然(荒川総合調査報告書1) 埼玉県 1987年 P.90」)

条里が展開するこの地域は関東平野の内陸部で、山からも距離があるため、夏の気温は高い。このため気温面では、熱帯性の作物である稲作にとっての条件はよい。次に稲作にとって重要な用排水の観点から、これらの地域を考えてみよう。

これらの地域を地形的にみると、熊谷扇状地の扇端部からその先に広がっている自然堤防地帯であり、自然堤防と後背湿地が広い面積を占めている(図-4)。つまりここは自然堤防と後背湿地、さらに埋没台地よりなり、高低差は大きくないが比較的狭い区域の中で、なだらかな起伏に富んでいる。そして利根川、荒川と密接に関連している。

利根川、荒川は出水時には自然氾濫し、後背湿地に湛水する。洪水のエネルギーからみて古代の幼稚な技術で対処するには困難であり、西方、北方からは利根川の水が、荒川の水は扇面上の旧河道を中心に流れてくる。

両川の水がなくなれば、後背湿地からは徐々に引水する。後背湿地には常に湛水している湖沼も広い面積を占めていたが、出水期にはさらに広い水面となっていた。当然のことながら、少雨の時は後背湿地の水位は低かった。自然の降雨状況に左右されて湿地の広さは異なり、水位は上下していたのである。つまり後背湿地に湛水する広さ、深さは年々の降雨状況によって定まり、かなりの変動が生じていたものと考えられる。

稲作は、この後背湿地を中心に展開されたものと判断している。それは十分に水の管理がなされたものではなかった。毎年の後背湿地の湛水状況に従って栽培されていたと推測される。あるいは広く栽培されながらも収穫できるのは、毎年の水位によって限られた地域であったと考えられる。つまり土地はなだらかな高低差があり、毎年の湛水状況に従って稲の成育に適した地域は限られる。しかし、常にどこかでは収穫できていた。どんな降雨状況でも、一定量の米の収穫は期待できたのである。このことより埼玉平野の自然堤防地帯では、「不安定の中の安定」という状況を呈していたものと判断している。

また大旱魃時にも後背湿地の水は完全に枯れることはない。湖・沼の規模は大きかったのであるが、さらに地形的に扇端部からその前方は、湧水に富んだ地域である。熊谷扇状地でも、扇端部は近年まで豊富な湧水があった。また別府条里地帯の西側に広がる洪積台地である隆起扇状地からも多量の湧水があり、これが旱魃時には重要な用水源となっていたと思われる。

しかし用水路を整備し、これらの水を灌漑用水として利用したのは、皆無でないにしても、ごく限られた一部地域でしかなかったと考えている。安定した灌漑区域の整備には、利根川、荒川のある程度の洪水防禦が必要であり、両河川の自然氾濫の状況ではその区域は限定される。古代から灌漑を施してい

た大和盆地とは、基本的条件が異なるのである⁷¹。

なお河川の氾濫に対し、ただ手をこまねいていただけでなく居住地を中心に築堤が試みられたことは、十分、考えられる。「日本書紀」には仁徳天皇の時代に淀川筋の茨田堤築造の記録が残っているが、この工事の指導をした人物として、河内の人・茨田杉子とともに武蔵の人・強頸があげられている⁵¹。強頸は、武蔵の国の出身者と判断してよいが、遠方からはるばるやってきて淀川治水に尽力したのは、埼玉平野を含む武蔵の国で治水事業が熱心に試みられたことの反映と考えている。

2) 舟運と物資輸送

埼玉古墳群は熊谷・行田条里の東端から東南方約2kmのところの自然堤防、埋没台地上に位置している。周辺より比較的高く、氾濫に対してより安全な地域に地域社会の中心が置かれ、古墳が造られていたのである。その権力が及ぶ範囲は、古墳の規模からしてかなり広かったと思われる。その権力基盤を、物資輸送の面から支えたのが舟運であった。

古代には埼玉平野は利根川、荒川が乱流しており、また大小の湖沼があった。これらは陸上交通にとって支障となったが、舟運にとっては格好の条件であった。この地域の古代の港として万葉集にも歌われ、有名なのが埼玉の津である。埼玉の津の場所は、北埼玉郡埼玉村大字埼玉であったといわれている⁶¹が、埼玉古墳群に隣接するこの港を中心に、埼玉平野一円あるいはそれ以上の区域から物資が集められたと考察される。

3. 埼玉平野の中世の開発

1) わが国開発史上における中世

沖積低地上でのわが国の開発は、条里制に代表される古代と、戦国時代から近世幕藩体制初期の二つの時期に大規模に行われたといわれる。後期の開発が行われたのは大河川の沖積低地で、戦国武将は多大な労働力を動かすその統率力とともに、築城等の経験により進歩した土木技術でもって開発を進めた。そして古代と近世に挟まれた中世は、大規模な開発は行われず、農業の発展は農具の改良、二毛作の展開にみられる集約化の方向であったといわれる。わが国開発史におけるこの時期の開発について、玉城

哲・旗手勲は次のように位置づけている⁷²。

「永原慶二によって『谷地型水田』と特徴づけられたように、地方土豪の相対的に小さな経済力と権力、そして、さして高かったと思われぬ土木技術によって担われたものであった。そこで、はなやかな大発展の時期ではなかったが、地方特に東日本への水田地帯の拡大という点では、けっして重要性が小さかったとはいえない。古代の大和王朝の開花にみられる大陸的諸文化の直接の複合という性格をこえて稲作農耕文化のもっとも基礎的部分が日本列島全体に深く、広く浸透し、土着化してゆく過程がこの時代であった」

ところが近年、平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての中世に大規模な開発が行われ、この時期は「大開墾時代」であったことが主張されている⁸¹。

筆者には、この時の開発が大開墾といわれる程、全国的に大規模に行われたかどうか判断できないが、それまで手がつけられなかった地域に開墾が進められていったことは、十分、考えられる。関東ではその開墾地をバックとして関東武士団が成立し、頼朝による鎌倉幕府成立となったのである。

東京都・埼玉県にまたがる武蔵国の中世における田畠数をみると、平安中期(930年ころ)に書かれた「和名類聚抄」では3万6,690町歩となっている。一方、室町時代中期(1450年ころ)に著された「拾芥抄」では田畠数5万1,540町歩と記載され、約1万5千町歩増えたことが分る。ただし「拾芥抄」の田畠数は室町時代の田畠数ではなく、その田畠数は平安末期にまでさかのぼるといわれている⁹¹。

さて埼玉平野の開発について、古代の稲作を「不安定の中の安定」と表現し、粗放農業ながら一定の生産量が確保されていたことを推論したが、水田地域をさらに拡大し、また安定した灌漑稲作を行うには利根川、荒川の洪水防禦が必要であった。特に大河川利根川氾濫の防禦は重要であったが、この役割を担ったのが酒巻から下流の利根川右岸堤と酒巻から上流での堤内地に延びている中条堤である。

2) 中条堤の成立

今井から上中条、酒井に到る中条堤こそが、利根川からの埼玉平野防衛の第一線だった。この中条堤の位置は、熊谷・行田条里地域のほぼ上流にあたる。

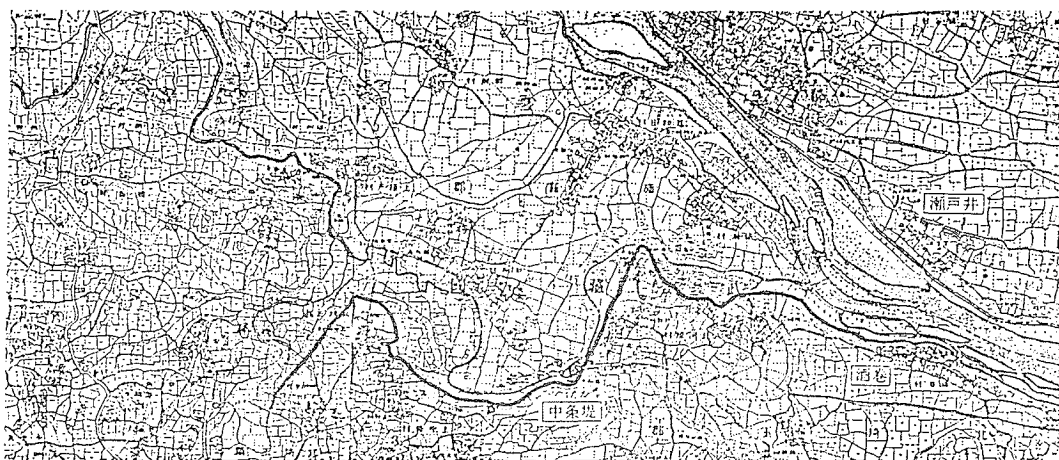


図-5 明治年代初期の中条堤周辺地形図(第1地方軍区迅速図「小泉村」明治17年 測量より作成)

熊谷・行田条里を守るようにして整備されてきたと判断することもできる。

埼玉平野では、中条堤を境にして古くより大きな相違が見られる。古墳でこの状況を見ると、中条堤より南、つまり利根川からみて下流には前章でみた埼玉古墳群、また若小玉古墳群、小見真観寺古墳群などの行田周辺の古墳群が見られる。ところが中条堤上流では、荒川の熊谷扇状地末端に横塚山古墳がみられるが、利根川の氾濫域にはみられない。古墳の存在は開発の裏返しと判断してよく、中条堤を境にして開発の相違がうかがえるのである。

中条堤を境にしての相違は、源頼朝による鎌倉幕府の創設に活躍し、それを支えた関東武士団の居住地からも判断される。中条堤下流には中条氏、河原氏、成田氏などが見られるが、その上流には妻沼町付近の長井荘に斎藤実盛が見られるのみである¹⁰⁾。

この相違は、利根川氾濫に対しての違いと考えられる。つまり中条堤が、あるいはその前身が古墳時代といわなくとも古代の末期には整備されていたと考えられるのである。それは自然堤防を巧みに利用して造られていったと思われる。記録として明文化されたものとして、鎌倉中期の1252(建長4)年に中条堤の一部である「水越」の地名が文書に記されていることを、「新編武蔵風土記稿」[1926(文政9)年]は述べている。また中条堤の連続としてある柿沼堤が、1232(貞永元)年大破したとの記録が東鑑にある¹¹⁾。

近世までの中条堤を境にしてのこのような相違を、1884(明治17)年測量された第一地方軍管区迅速図(

「妻沼村」、「小泉村」、「行田町」、「館林」、「羽生町」)でみてもよく読みとれる。例えば河川の形状である。迅速図で見ると上流は礫挽台地および渡良瀬川の隆起扇状地で抑えこまれる地勢であるが、そこを利根川は溶筋を何流にも分け、乱流しているかの状況で蛇行を繰り返す。低水路に沿っての堤防はほとんど見当たらず、堤防は各集落の囲堤が中心である。

一方下流は広大な埼玉平野が拡がり、利根川は溶筋も一本となって甚だしい蛇行もなくなる。堤防も低水路に沿って平行に両側に現れる。また上・下流の相違は、土地利用形態にもはっきり現れる。上流では畑地、桑地の占める面積が大であるが、下流は純然たる水田地帯が拡がっている。地勢上においても利根川の形態上においても上・下流は、はっきりした相違を示すのである。その境界をなすのが中条堤、またそれと一対となっている酒巻・瀬戸井の狭窄部である(図-5)。

3) 関東武士団の立地

中条堤から下流の利根川氾濫域にも成田氏、河原氏などの関東武士団の居住地があったことを先に述べた。自然堤防、埋没台地を根拠として、洪水氾濫に立ち向かいながら、耕地開発が少しずつ進められたと考えられる。しかし関東武士団の主要な根拠地は大河川の氾濫原ではなく、その周辺の関東ローム層台地であった。そして水田の開発地として、関東ローム層台地を刻んでいる谷地が重要な場であった。この谷地の一つ一つは広くないが、周辺の台地より雨水のみならず地下水も流れこむ。このため地下水

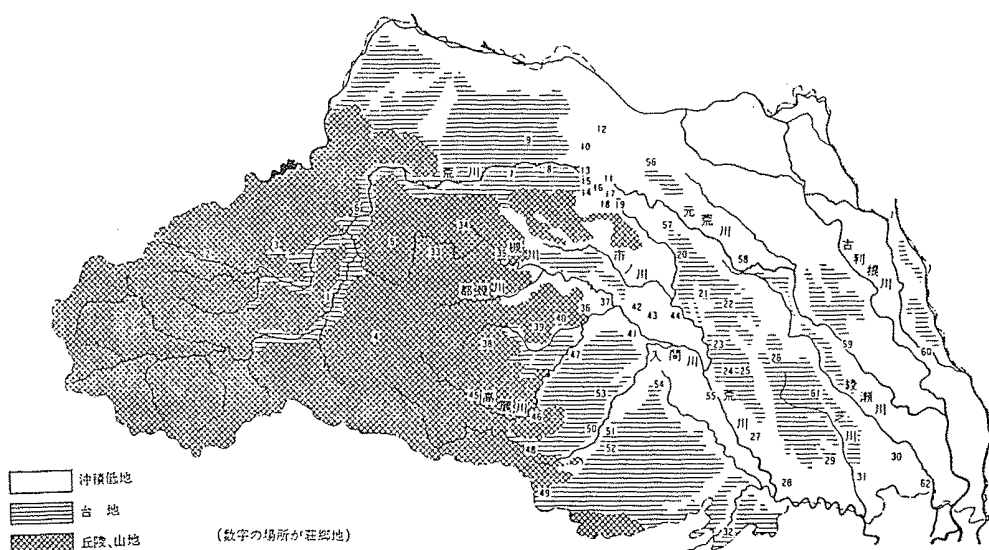


図-6 荒川流域の中世荘郷の分布図

出典：「荒川人文Ⅰ（荒川総合調査報告書2）」埼玉県 1987年 P.234

位は高く、湿地となるところが多く、生産性はそれほど高くないが、早魃に対しては強かった。つまり流域面積は大きくないためそれ程大きな洪水は生ぜず、生産性は低い反面、早魃には強かった。谷地田と呼ばれた水田がこのような所で、古代末期から中世初期にかけて開発されたのである。

また台地際の大河川の沖積低地も開発が進められたと考えられる。ここは沖積低地の中でも小高くなっており、大河川の氾濫時にも水にかぶる頻度は少ない。その開発面積は大きくないが、大河川の氾濫原開発の足掛りとなり、台地側を除く三方を囲んだ築堤により堤内地を確保していったと考えられる。

このような開発状況を埼玉平野、荒川流域の中世在郷でみたのが図-6である。

4) 資料にみる鎌倉幕府の開墾政策¹²⁾

鎌倉幕府は、そのお膝下である関東地方の開墾を積極的に取りこんでいた。開墾した土地を御家人に給付し、幕府政権の財政的基盤を強固にするためである。開墾奨励の記事は「吾妻鏡」に度々出るが、埼玉平野では太田荘の開発が次のように述べられている。なお太田荘の範囲は、北埼玉郡の大部分と南埼玉郡の北部一帯から大里郡の一部にかけての1,820村におよんだという。そこには元荒川、古利根川、綾瀬川が流れている。

「寛喜二年庚寅正月廿六日巳丑。於武州公文所。

武蔵國太田庄内荒野可新聞事。有其沙汰。尾藤近入道道然奉行之云々。」

1230年武州の公文所において太田荘の荒野新開の儀があり、尾藤入道が奉行人に任命された。

この時、具体的にどのような開発が行われたのか、明らかでないが、中条堤の整備も進められたことも考えられる。

埼玉平野ではなく関東平野の他の地域では、これ以外でも開発についてたびたび記されている。

「文治五年二月卅日壬寅。

又安房。上総。下総等國々。多以有荒野。而庶民不耕作之間。更無公私之益。仍招居浪人。令開發之。可備乃貢之旨。被仰其所地頭等云々。」

1189年、安房、上総、下総の国には荒野が多くあるが、耕作されていず、公私とも利益がない。よって浪人を招いてきて、これを開発するよう地頭等に命ずる。

「正治元年四月

廿七日戊子。仰東國分地頭等。可新開水便荒野之旨。今日有其沙汰。几稱荒不作等。於乃貢減少之地者。向後不可許領掌之由。同被定云々。廣元奉行之云々。」

別当大江広元が奉行として、1199年東國の地頭に水の便のある荒地の開発を行うよう命じた。さらに「荒不作」と称して行う年貢の減少は、今後一切認め

ないことを命じた。

「承元元年三月廿日壬辰。武藏國荒野等可令開發之由。可相觸地頭等之趣。被仰武州云々。廣元朝臣奉行之云々。」

1207年、別当大江広元が奉行として、武藏国の荒野の開発を地頭に行うよう命じた。

大きな河川としては、多摩川の開発が1241年次のように命じられている。

「仁治二年十月廿二日丙子。以武藏野。可被開水田之由。議定訖。就之。可被懸上多磨河水之間。可為犯土之儀歟。將又可為將軍家御沙汰歟。(以下略)」

さらに同年この多摩川開発の促進のため3名の奉行が次のように派遣されている。

「仁治二年十二月廿四日丁丑。堀-通多磨川。堀-衛門尉。多賀谷兵衛尉。恒富兵衛尉等為奉行。今日所下向彼國也。」

大河川多摩川の開発がこのように計画・実行されていることは、興味深い。河川の上流部で、比較的、手のつけやすいところだと思われる。

以上、鎌倉幕府によって開墾が積極的に進められていったことが分る。しかし利根川のような大河川の氾濫防禦の施設は、当時の技術水準にとって容易ではなく、何世代にもわたり少しずつ進められていったものと考えられる。

5) 埼玉平野の開発の進展

① 行田周辺の開発

中条堤、それと連続する酒巻下流の利根川右岸堤の長い年月にわたる築造によって、開発の基盤は整えられていった。利根川右岸堤も中条堤と同様に築造記録は見あたらないが、対岸の左岸では、妻沼の対岸古戸地先から下流の下五カ村までの8里17町(約35キロメートル)に、1595(文禄4)年、築堤されたことが記録されている。堤防の大きさは、高さ15～20尺、敷15～16間、馬踏3～5間である。対岸にこのような堤防が築かれたのであるから、沖積低地の大きさ、開発の進行過程からみて、少なくとも同等の堤防が右岸にあったと考えられる。

築造の記録がないのは、長い年月にわたって多大な労力をささげながら、少しずつ少しずつ整備されていった証左だと思われる。この築堤をもとに埼玉平野では開発が進められたと推測されるが、その重

要なエポックが、戦国時代初期の1490(延徳2)年、成田親泰による忍城(行田市)の築城である。この時、成田氏は中条堤を含む幡羅、埼玉二郡にわたり数十村を統治した。

中条堤より下流地域での忍城の成立は、中条堤が整備され、忍城周辺が利根川氾濫からかなりの程度、安全になったことを示す。また開発も進められたと思われるが、時代が少し下った17世紀初めの1609(永正6)年、歌人宗長が忍城で次の歌を読んだ¹³⁾。

「武州成田下総守頭泰ノ亭にて詠める

あしかもの みぎは 雁の常世かな

水郷なり館の廻り四方沼水幾重ともなく蘆の霜枯れ二十余町、四方へ掛けて水鳥多く見え渡るさまなるべし」

この地は水郷であって、20余町霜枯れた芦があり、館の回り四方、沼が幾重にもはりめぐっていることを述べている。これらの沼水が、どこからきたものかは判断できないが、忍城周辺が水はけの余りよくない地域であったことが分る。それはまた、低地での稲作がその年々の出水によって制約され不安定であったことを推定させる。さらに下がった近世初期であるが、稲作の生産基盤は次のようであった¹⁴⁾。

1590(天正18)年徳川家康関東入府の時、忍城は松平家忠が城主となり、石高は1万石であったが、その内訳は新郷、下新郷、荒木、別所の諸村で4,724石3斗1升、須加村で3,333石5斗6升、犬塚と西荒井両村で943石3斗1升、下中条で317石5斗6升、酒巻の郷で681石2斗6升であった。

ここで目につくのはこれらの村々のうち、荒井村は忍城の直南方であるが、他はすべて利根川沿岸の村々であることである。この状況は、この時までには安定的に生産が行われていたのは、利根川沿いに拡く発達していた自然堤防上、およびその周辺であり、忍城周辺をはじめとするその他の低地帯は開発の進展が遅れていたことを示している。

② 元荒川の付替

埼玉平野における大規模な河川処理でありながら、記録的にほとんど知られていないものがある。下栢間・高虫地点での元荒川の付替である。

元荒川は近世初頭の1609(寛永6)年、久下地点で付替えられ、大宮台地と人間台地の間の和田吉野川・

入間川筋を流れる現況となった。それ以前の主流は元荒川であったが、久下地点での近世初頭の付替以前に、下栢間・高虫地点でローム層台地の人工開削が行われ、荒川は綾瀬川筋から星川筋へ落とされたのである。この根拠として、次の(a)(b)二つの理由を挙げる。

(a) 地形図上で元荒川を追っていくと、下栢間・高虫区間で他の区域とは異なる状況となっている。土地利用の観点からそれをみると、他の地域では河川の両岸に幅の狭い畑作地帯があり、それに続いて水田地帯となっている。この状況を地形的にみると、畑作地帯は自然堤防地帯、その後背湿地が水田地帯で、両岸に沖積層が広く広がっているのである。ところが、下栢間・高虫地区では畑作地帯が幅広く広がり、そこには群生した雑木・広葉樹が見られる。この畑作地帯は自然堤防上に展開しているのではなく、現地調査によると関東ローム層台地上であった。つまり、関東平野で広く見られる洪積層の赤土の上に開発されたものである。

(b) 現地での調査によると、下栢間・高虫区間は昭和の初め改修されて拡幅、浚渫された。この工事で河底より浚渫された土は、黒い粘土質のものであったが、拡幅した土は赤色で畑と同じ色であった。このことは、両岸には沖積層は全くなかったことを示している。

綾瀬川筋から元荒川へのこのような流路変更のためには、その最上流端に綾瀬川筋への流下を抑える堤防を築かねばならない。流路変更と築堤は一体となって行われたと考えてよいが、この堤防は後に備前堤と呼ばれたものである。

備前堤は、慶長年間(1596年～1614年)に伊奈備前守忠次によって築かれたといわれる。しかし、下栢間・高虫の掘削について記録上何も残されていない。1,500mにもわたる掘削により行われたこのような大規模な河川付替が何の記録にも現われてこないことから、下栢間・高虫での人工開削は近世以前に行われたもので、慶長年間の伊奈忠次による築堤は、旧来のものの修復ないし増強と考えられる。家康関東入国以降であつたら、何がしかの記録が残されていると判断されるのである。

では下栢間・高虫区間の人工開削による付替の目

的は何だったのだろうか。ここより下流の元荒川筋には、埼玉平野の重要な拠点、岩槻城が慈恩寺台地の突端に15世紀の中頃、太田氏によって築かれた。元荒川は外堀の役割を果たしていたが、この機能を高めるため付替えられたのであろうか。あるいは岩槻城の拠点性を舟運の点から高めるために行つたのだろうか。だが筆者は、古くから開発が進められていた越ヶ谷周辺の水田整備が目的であったと考えている。

越ヶ谷周辺の地形は、利根川によって形成された自然堤防が広く発達し流路は大きく蛇行している。そしてここは古代に条里制が行われたところであり、古くから重要な生産拠点であった。この地域は、下中条から酒巻の利根川右岸堤および中条堤の築造・整備によって、洪水の流下は妨げられた。これを基盤にして越ヶ谷周辺のみならず星川周辺では、開発が進められていったと考えられる。しかしそうになると、山地に水源をもたない星川では灌漑用水が不足する。それを補うものとして、下栢間・高虫間の開削が行われたと考察される。

なお越ヶ谷周辺の元荒川筋での有名な取水堰として、瓦曽根溜井がある。この溜井は慶長年間に築かれたといわれるが、その自然条件からして乱流河川を整理すれば簡単な草堰で取水可能である。越ヶ谷周辺の古い時代からの開発を考えると、「瓦曽根溜井記」にいう慶長の頃の整備は¹⁵⁾、旧来からあったものの修復ないし増強と判断するのが妥当と思われる。

高虫・下栢間での開削工事は、多大な労力を要する。岩槻に城を築いた太田氏の時代か、あるいはそれ以降の後北条家の支配の時代に行われたものと考えている。

4. 徳川家康の入国

中条堤の整備、それに基づく行田周辺の開発、また元荒川筋の付替に代表するように、関東平野の農地開発は、中世から戦国時代にかけて着々と進行的であった。

1590(天正18)年、徳川家康は入国したが、領国経営を直接指導したのは伊奈備前守忠次である。この後、江戸中期まで伊奈家は関東郡代を代々襲いでい

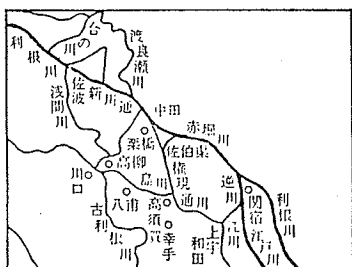


圖-7 八甫周边河川復元圖

くが、忠次はその初代である。

さて関東平野の治水・利水施設に備前の名を冠したものがある。著名なものとしては、先にみた綾瀬川流頭の備前堤、烏川から取水し中条堤の上流部、および下流の行田周辺まで延々と導水している備前堀がある。しかし筆者は、忠次が行ったのは後北条家の時代までに整備されながら、戦乱によって荒廃した施設の修復が中心であったと判断している。そして徳川幕府による本格的な開発が進められていくのは、三代忠治が伊奈家を襲ぎ、関東郡代になった元和年間以降であると考えている。

さらに領国経営の基盤である物資輸送手段についてみてみよう。周知のように近世までの経済の中心は米であり、米の輸送には、舟運の果たす役割が大きかった。その舟運は内陸部では河川舟運だが、近世になって角倉了以、河村瑞賢の活躍によって日本全国の流通網の整備が進められる。では家康が入る以前の関東の舟運状況はどうだったであろうか。北条氏の花押のある文書として次の二つがある¹⁶⁾。

「(前文缺ク)於此儀は明鏡に聞かせ候。

一、八甫迄上船者商船及_二卅艘_一之由申、其直に彼船も上候條別に咎無_レ之候之條早々可_レ被_レ戻候。

一、八甫之儀者當知行に候、然者無體に他之船可
レ通子細に無_レ之候、今迄此穿鑿爲_二如何不_レ被_レ申
候、向後者一改可_二申付_一候、誰歟船通共改而可_レ
承候、恐々謹言

六月三日

氏照(花押)

布施美作守殿

「船壹艘」

右氏照被官船也、從_レ佐倉關宿、自_レ葛西栗橋往復不_レ可_レ有_レ相違候、若橫合之輩有_レ之者爲_レ先_レ此

證文、可申披為後日之狀如件、

天正四年癸卯九月廿三日 氏照(花押)

前者の文書では、八甫を中心に北条氏所属と思われる30艘の商船について述べている。会の川と浅間川が合流し島川が分かれる川口、そして島川沿いの八甫は中世から近世初頭にかけて重要な交通の拠点であった(図-7)。

後者の文書では、北条氏所属の船が佐倉から関宿まで、また現東京都葛飾区葛西から栗橋まで往復していたことを述べている。近世になって栗橋から関宿間のローム層台地が開削されたりして、関宿を通っての江戸と佐倉・銚子の舟運路が整備される。しかしこの文書で、後北条家の時代にこの方面の内陸舟運もかなり熱心に行われたことが分る。

このように耕地開発、舟運の状況を見ると、家康入国時、関東平野の開発基盤はかなり整備されていたことが分る。家康にとって決して未開の地への移封ではなかったのである。

注釈・引用文献

- 1) 「土地分類図(地形分類図)埼玉県」経済企画庁
総合開発局 昭和48年
- 2) 栗原良輔「利根川治水史」官界公論社 昭和18
年 P.114
- 3) 「新編埼玉県史通史編1」埼玉県 昭和62年
PP.289～316
- 4) 古代の大和盆地の開発については、「国土の開
発と河川」(松浦茂樹 鹿島出版会 1989)に筆者
は述べている。
- 5) 渡部英三郎「大化改新以前の水利と土木」
(「水利と土木」12巻9号 PP.47～66)
- 6) 「埼玉県史 第2巻」埼玉県 昭和6年
PP.262～266
- 7) 玉城哲・旗手勲「風土―大地と人間の歴史」平
凡社 1974年 P.31
- 8) 木村茂光「大開墾時代の開発―その技術と性格」
(三浦圭一編「技術の社会史 第一巻 古代中世
の技術と社会」有斐閣 1982年)
- 9) 「大開墾時代の開発」前出(「技術の社会史 第
一卷」前出 P.152)
- 10) 「埼玉県史 第3巻」埼玉県 昭和8年 PP.86～96
- 11) 宮村忠「利根川治水の成立(5)」(「日本の川」
13号 日本河川開発調査会 昭和53年 P.48)
- 12) 島崎武雄「関東地方港湾開発史論(上)」東京大
学学位論文 昭和50年 PP.142～159
「荒川 人文Ⅰ―荒川総合調査報告書2―」埼玉
県 1987年 PP.335～347
- 13) 「行田市史 上巻」行田市史編纂委員会 行田市
昭和38年 P.633
- 14) 「行田市史 下巻」行田市史編纂委員会 行田市
昭和39年 P.42
- 15) 「字瓦曽根溜井記」(八条領用水のため、凡そ慶
長之頃か元荒川を堰溜井ニ御取立有之哉)(「新
編埼玉県史資料編13」埼玉県 昭和58年 P.441)
- 16) 「埼玉県史 第4巻」埼玉県 昭和9年 PP.476～477